

# 東京バッハ合唱団 月報

[第738号] 2023年12月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.738

December 2023

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

## 2023年を終えて、新年を！

大村 恵美子 (東京バッハ合唱団 主宰者)

この年が、もうあと少しで終わり、また未知の新しい年を迎える。何というしあわせ！

今年は、世界中あちこちで、相も変わらず人間同士の殺し合いがあり、戦争で大破壊が続き、自分たちが苦勞して築いたものを、すさまじい瓦礫の山にしてしまった。

そんな人生の馬鹿馬鹿しさを、おとな達は どうして性懲りもなく繰り返すのか？ 私はよく思うのだが、殺された人間の数、何年は何人、何年は何人と、発表してみたら、少しは反省のきっかけにでもなるのだろうか。日本の刑法では、人間1名を殺しても、終身刑で罰せられるのに、愚かな暴力で一瞬に何百何千の生命財産を潰しても、平気でそんな者を罰しめせず生き通させておいていいのか？

一方、今年の夏は史上これまでになかったくらいに暑さがきびしく、そのおかげで秋の紅葉は目を見張るほど鮮やかで美しかった。その自然の装いの恩恵に、われわれ人類の野蛮な破壊だらけの所業を恥じないでいられるのか？

地上の生を考えると、生み育てて喜びと共に進めて行くのが人生。おとなは子供たちに、そう教えるのが務めでしょう。いくら便利で、すごいものを造り出す能力にたけていても、それを提供する当の人間たちが、たがいに殺し合ったりしては、若い仲間たち、この地球に生まれて来ておとなの中に交じって、新しい人生を始めようとする若人には、「？」マークしか与えないに違いない。

11月4日の土曜、私は或る意味ですばらしい体験に恵まれた。ふだんの練習場の都合で、臨時の会場(世田谷平安教会礼拝堂)に変更となった日のこと。合唱レッスンの始めに、私は改めて皆さんに、注意してみた。

「正しく歌って、変なところで間違ったりしないように、楽譜をしっかりと読もうと、まじめな努力を注ぐ気

持ちは分かるけれど、少々譜面通りにならなくなっていた。それより、いっせいに指揮を見て、みんなが同じ“乗り乗り”の気分で、音楽を作り出すほうが楽しいですからね」

いつも感じるのは、みんながいちばん気遣うのは、個人的な感情で、「自分がヘマをして乱すことのないよう、正しく歌おう」という自戒の厳しさ。

合唱音楽は、個人の力より、そこに居合わせる一同の気持ちを、新しく造り上げることにある。よかった悪かったよりも、みんなの声が一つの音楽となって鳴り響くこと。そこには、自分は目立つよりも、溶け込むことが大事。判断よりも、一つになる楽しさがあるものだ。

もっとその音楽に乗ってしまおう。良し悪し、正誤など、覚めた自意識よりは、もっとその音楽に入り込んでいくのだ。

それが、この日には出来たのだった。

歌うみんなが、譜面を追うよりも、指揮者を見て、つまり顔をあげて、ヨシ、ヨシ、とうなずく表情で音楽を造り出した——これが出来てこそ、合唱となる。

初めてみたいに私もついてゆけた。バンザイ、成功！ここまで来れば、もう何も言わずに音楽に任せきろう。今年中に、よくここまで達しきれた。これからは楽しみだけ。皆さま、おめでとう！

あとは、12月早々の、《マニフィカト》と《クリスマス・オラトリオ》のシングイン本番を待つばかり。

そして、年末年始。また笑顔でお会いしましょう。新しい2024年に、揃って仲良くネ！



■千葉寫真館 2023「八重山の海と花々」①～⑥ (2023/10)  
毎回好評、千葉光雄さん(団員)の最新作、お楽しみください。  
①左: 星の砂ビーチ(武富島)、②右: フウリンブツソウゲ(風鈴仏桑花)

### 月報 2023年12月号 CONTENTS

- ・千葉寫真館 2023「八重山の海と花々」①～⑥ …p. 1-3
- ・シングイン曲目紹介 p. 2-3 ・お便り(青田 健) p. 3
- ・連載: 退屈するのはいそがしい [34] (大野博人) p. 4



■千葉寫真館 2023  
「八重山の海と花々」  
③左：ブーゲンビリア  
ア（ピンク）  
④下：彼岸花（イエロー）

## シングイン曲目紹介

### 「聖母マリアの讃歌」と

### 「キリスト降誕の物語音楽」

大村 健二（団員）

2年前から、年末に“シングイン”と称して《クリスマス・オラトリオ》の合唱部分を、心得のある方々（どこかのコーラスで歌唱経験がある人、あるいはウチのかつての団員方など）に呼びかけて、ひろく募り、ぶっつけ本番で歌ってみよう、という企画をつづけています。もちろん現役団員のみなさんには、たっぷり練習をしていただきました。

目的は、合唱団員の新規勧誘です。

原詞での経験者（国内では、ウチの団以外は多分すべて原詞歌唱）には、バッハを日本語で歌うことの妙味を味わっていただくこと、OG・OBの方々には、時を経てもう一度、日本語で歌うバッハ音楽の心地よさを思い出していただくこと、こんなことを想定して企画してみました。「ではひとつ、自分も入団（復帰）してみようか」となることを願って。今回も、期待しつつ準備しています。

もちろん、もっぱら聞くのが楽しみ、という参加者も大勢いらっしゃいます。歌う人、オーケストラ、聴く人がいっしょになってバッハの音楽に浸る……、至福のひとつです。

この企画では、「バッハに初めて触れる」という方にもお楽しみいただけるよう、多少の道案内をさせていただきます。「心得のある方々」にはお退屈でしょうがご協力ください。

本日の2曲、いずれも抜粋ですが、取り上げる楽曲は、曲全体の核心をいささかも外してはみませんので、これをきっかけに、バッハを代表する名曲に親しむ“よすが”としていただければ幸いです。

#### ◆2つのリアリティ

2曲にそれぞれ、この稿の表題のような副題をつけました。《マニフィカト》は「聖母マリアの讃歌」、《クリスマス・オラトリオ》は「キリスト降誕の物語音楽」。カタカナばかりよりは、よっぽど親しみが沸きます。チラシでも、こうしておけば良かったです。

以下で、各曲の簡単な紹介をしますが、副題を見れば、主題は一目瞭然です。プログラムの表紙をながめ

てください。マリアの肖像があつて、曲名が並んでいます（チラシと同じ挿画）。フィレンツェのサンマルコ修道院（今、美術館）の内部の階段を上り始めると正面にある、フラ・アンジェリコの有名な「受胎告知」の、その右半分です。左に天使ガブリエルが膝をかがめて、マリアに向かい、「おめでとう、恵みに溢れた方、主があなたとともにおられます」と告げ、神の子を身ごもることを暗示しています。別の画家の同じ主題の絵（シモーネ・マルティーニなど）では、今の言葉が、ラテン語の文字になって、マリアに向かって飛んでいたりします。

マリアが神の子を宿す、神の子が誕生する、今日の2曲の物語上での時間差を想像してみてください。あえて、物語と歴史（もしくは現実）とを混同してみましよう。いきなり形而下で恐縮ですが、ぼくらは妊娠期間を「十月（とつき）十日（とうか）」と習いましたが、実際には9か月とちょっとだそうです。このような地について実感をもちながら、耳を傾けるというのも、バッハに親しむ一つの方法です。日本のプロテスタント教会では、マリアの祝日は限られています、現在のカトリック教会やバッハ当時のライプツィヒでは、3月25日を「マリアの受胎告知の祝日」としています。

後に触れますが、《マニフィカト》の上演されるべき日は「マリアのエリサベツ訪問の祝日」（バッハ時代のライプツィヒでは毎年7月2日）と定められていますので、本日の後半の曲、《クリスマス・オラトリオ》までの間は、教会歴上（またはバッハ歴上）半年ほどの隔たりがあります。現実生活上の300日ほど、もしくは教会歴上の半年ほどの差をもって、2曲が並んでいます。このリアリティが一つ。

もう一つのリアリティは、言うまでもなく、この二つの出来事が起こった地の、2000年後の現実であり、われわれが日々ニュースで接している残虐と悲惨です。これについて語る場ではありませんが、パレスティナとイスラエル、この全地が、この2曲の音楽の背景であることは意識しておくべきでしょう。「旧約聖書」はユダヤ教の正典であると同時に、バッハも含めたキリスト教徒にとっても、その正典の一つでもあるのです。

#### ◆《マニフィカト》“聖母マリアの讃歌”

新約聖書「ルカによる福音書」によると、若いマリアが、天使から「あなたは神の子を宿す」というお告げを伝えられます（ルカ1,26-38）。そのころすでにマリアの親類のエリサベトは、老齢に達していたにもかかわらず





■千葉写真館 2023  
「八重山の海と花々」  
⑤左：朝の小浜島

⑥下：星の砂ビーチの公園と水盤（竹富島）

ず男子を身ごもっていました。そもそも「ルカ伝」は、この奇跡から物語られます。

のちにマリアは、身重のエリサベトを訪ねました。マリアの挨拶を受けて、エリサベトのお腹の赤ん坊(後の洗礼者ヨハネ)が飛び跳ねた、と書かれています。これを描写する音の動きが、例の有名な147番のカンタータ (Herz und Mund und Tat und Leben) の曲中に現れます (BWV 147-8) が、また別の機会に。

神の不思議なわざによって身ごもった二人の女性の対話のなかで、感極まったマリアの口をついて出た、驚きと感謝と決意の祈りの言葉、それが「マニフィカト」(「わが心 主をあがめ……」の意のラテン語冒頭句) 以下全10節からなる頌歌です (ルカ 1, 47-55)。

この「マニフィカト」は、中世以来のローマ・カトリック教会では、晩課(夕べの祈り)での重要な典礼歌として歌いつがれています。バッハは、この頌歌全節を歌詞として(末尾に「頌栄」を付加)、「マリアのエリザベト訪問の祝日」の礼拝のための音楽を作曲しました。それが《マニフィカト》ニ長調 (BWV 243) です。バッハは、それに先立つ時期のクリスマス礼拝のために、キリスト生誕を祝う挿入合唱を添えた別稿 (BWV 243a) を用意しました。ここからの挿入曲も移調して加えてあります。

### ◆《クリスマス・オラトリオ》“キリスト降誕の物語音楽”

ご存じのとおりクリスマス(降誕節)は、神の子キリストの誕生を喜び、記念する大きな祝日です。バッハ当時の降誕節は、12月25日から年明けを挟んで1月6日(顕現祭)までの12日間にわたって祝われました。



この間に、合唱付きの音楽の演奏される機会が6日あり(年によって異なります)、バッハは、それぞれに降誕物語の各場面を割り当てて全6部からなる壮大なオラトリオ(物語音楽)を作曲しました (BWV 248)。

今回取り上げる情景は、荒野で羊の番をする羊飼いたちに御子誕生のニュースが真っ先に伝えられ

## お・た・よ・り

青田 健 (後援会員、元団員)

長いことご無沙汰しております、旧バスの後援会員、青田健でございます。

学生時代からバッハの器楽曲ばかりを、好んで聴いておりましたが、大学時代の友人、故・松島佐紀夫君に誘われて入団させていただき、短い間ではありましたが、バッハの作品に重要な部分を占める声楽曲のいくつかを自分で歌うことで、以後鑑賞の幅が大きく広がる機会を与えてくださったことに感謝しております。

いつの間にか歳をとり、今年は90才を迎え、それでも持病をかかえながら何とか不自由な一人暮らしを続けておりますが、この1年来、耳の衰えが著しく、歌うことはもちろん、学生時代から大好きなバッハを中心としたドイツ、オーストリア音楽の鑑賞さえもほとんど満足にできなくなり、生活に著しい寂しさを感じております。

そんななか、毎月いただく月報は楽しみに拝見しております。今後ともよろしく願いいたします。

たこと、天使たちの大合唱のシーンなど(第2部、クリスマス第2日=12月26日用)と、羊飼いたちが星に導かれて、誕生したばかりの聖母子のもとにたどりつき、賛美をささげたと記された場面(第3部、同第3日=12月27日用)です。今年のシングインの場では、クリスマスの意義の内面を4声部のコーラスで歌い上げる「コラール」を中心に据えてみました。

オラトリオに関しては、みなさんストーリーはよくご存じでしょうし、バッハが誰でも歌えるようにと願って和声付けを施したコラールが主ですので、多くのお客様には、ご一緒に声を出して歌っていただけるはず。大胆に音ははずして大声でどうぞ。オーケストラも合唱団員も、多少のことには驚きません。ただし合唱は、周りの皆さんの声を聞き、声を合わせ、器楽とも一緒に響きをつくるものです。お忘れなく。

プログラムに、ルカ伝のテキストを載せました。実際のオラトリオの中では、エヴァンゲリスト(福音書記者/福音史家)と呼ばれるテノール歌手が、節をつけて朗読するところですが(日本語上演では大村恵美子訳歌詞)、分かりやすさを考えて、聖書本文を現代語の訳文で掲載しました。プログラムを見ながら、曲の進行を追っていただければ幸いです。というわけで、ここでは、いちいち解説を挟みません。

器楽だけの序曲(シンフォニア)から開幕です。満天の星のもと、上空では天使たちが舞い、地上では羊飼いが羊の番をしています。ある解釈では、フルートと弦が天使たち、オーボエ・ダ・カッチャ(狩りのオーボエ)とダムール(愛のオーボエ)のオーボエ族が羊飼いの描写だそうです。お楽しみください。〈ア〉

◆上演歌詞対訳は、当団HPからご覧いただけます。  
[http://bachchor-tokyo.jp/japanese\\_words/index.htm](http://bachchor-tokyo.jp/japanese_words/index.htm)

<連載随想>

退屈するのはいそがしい [34]

## ヴェルサイユで

安曇野閑人 大野 博人



一人の人間の権力や富への欲望は、どこまでふくれあがるものか。そんなことを考えさせる場所のひとつがフランスのヴェルサイユ宮殿かもしれない。

この11月、4年ぶりにフランスを旅行した。そのうち3日間はパリ郊外のヴェルサイユ市内に住む友人宅に泊めてもらった。宮殿は前にも見物したことがあるが、せっかくの機会だからと再訪した。

いうまでもなく、贅を尽くした城や宮殿が点在する敷地全体はとんでもなく広い。友人宅から宮殿敷地の入り口の一つまでは歩いて20分ほど。そんなに遠くない。だが、入ってからの主要な宮殿までの道のりはもっと長い。とぼとぼと歩いていると、敷地内をめぐる小さな列車の形をした乗り物が横を通り過ぎる。大半の見学者はそれを利用しているようだ。

敷地の面積は約1000ヘクタール。といわれてもピンとこない。陳腐なたとえになるが、東京ドームと比べてみようとして計算したら200個分以上……。やっぱりピンとこない。その後のフランス革命で敷地は10分の1くらいに縮められて、これだというのだ。途方もないプロジェクトだったことだけはわかる。

この宮殿を建てた「太陽王」ルイ14世は1643年、パリ郊外のサンジェルマン・アン・レイの宮殿で生まれた。ここは今、博物館になっていて以前に訪れたことがある。もちろん大きな城だが、ヴェルサイユと比べるとむしろ質素に感じるくらい。

知り合いのジャーナリストは、当時は自分の権威とフランスの大国ぶりを見せつける政治的な必要もあったんだろうという。それにしても、二つの宮殿の規模のへだたりは、グロテスクに膨張する権勢欲も浮き彫りにして見せている。

みごとな文化遺産を目にしながら、こんな風にちょっと斜にかまえてしまうのはブンヤ稼業で身についた悪癖か。でも、こんな宮殿までつくったら、そりゃ革命が起きちゃうよなあ、と思ってしまう。

その翌日、この地方に点在する小さなシャトーのひとつを見学した。小さいといっても、もとは貴族の邸宅と庭園だから、それなりに立派。英国の皇太子やマルセル・ブルーストも滞在したことがある。今は結婚式の宴会会場として貸し出している。昔からずっと同じ家族が代々所有者というのが特徴で、ちょっと珍しいのだそうだ。

ガイドの女性が、今の所有者は十何代目かの「公爵」だという。もちろん今のフランスに公式には貴族はいない。それでもエラそうな肩書きを名乗り続ける人た

ちはいる。ありがたがる人たちもまだいる。歴史の香りを求めて来たのにシラケてしまった。

とはいえ、フランス各地の歴史的な建物を見て斜にかまえたり、シラケたりしてばかりいたわけではない。実際、権力者や特権階級の歴史だけが残っているわけでもない。

南西部のトゥールーズでは、通信社を退職してパリから移住した友人夫妻宅に泊めてもらった。住んでいるのは古い街並みの区域のアパートマン。しっかりした石造りで、けっこう古そう。いつ頃に建てられたのかと尋ねたら「たぶん革命の数年前。1790年代かな」。

ヴェルサイユの友人は、「うちのアパートマンはそんなに新しくない。19世紀だから」。エレベーターはらせん階段のまん中のわずかな空間に無理やり設置してあって、これまた古くて狭い。5階まで上るのに3人乗ったらスーツケースが入らなかった。

北部フランドル地方の主要都市、リールで泊めてくれた友人は町を案内しながら、「あの塔は中世、あそこの商店街は17世紀」……。彼の家は、19世紀半ばの建設で、そのころは金属細工のアトリエだったらしい。

ほかにも、穀物倉庫がコンサートホールになっていたり、屠畜場が美術館になっていたり。歴史は特別な場所だけに残っているのではない。建て替えられる建物も多いが、人々が日常的に行き交う区域の多くがまだまだ歴史と直結している。それが個性的な町の顔にもなっている。

街並みからも商店街からも歴史がどんどん遠ざかっていく自分の国の風景を思っ、少しうらやましくなった。

(団友・後援会員、元朝日新聞記者)



■リールの街角。古い建物に囲まれた小さな広場が週末の買い物客で賑わっていた (撮影と説明は筆者)